

ペン俳句会 臨時句会報(第三六四号)

令和六年十二月五日(木)

兼題『熱爛』、席題『短』

句会を、今年十一月と同じ場所で開催。出席八名。投句十名

志村 良知

背を丸め啜る熱爛父に似て

夕べ迫る根津の社の時雨かな

櫛落ち葉脚の短き犬埋もれ

赤黄色残る緑も櫛紅葉

丹沢の稜線冴へて冬に入る

埴輪展森に残れる暮の秋

大津 そうかい

異人坂下れば上野枯蓮

卓袱台や昼の団栗独楽と化し

禿頭の変らぬ短気冬の雷

熱爛や鬱積洗ひ流さむと

供花明きお七の墓や時雨過ぐ

落葉して寝袋とせむ日差し燦

中村 晃也

熱爛をチビチビ夜の待合室

欲しき物無くして覗く酉の市

針穴の見えて通らぬ師走かな

ヨードン吾を抜き去る枯落葉

小指立て爛酒注ぐ京訛り

凍て星やシヨパンのピアノ短調

浜口 金魚姫

鯛焼の供へる向きを妣に聞く

水面は水尾引くキャンパスかいつぶり

熱爛や湯気の向こうに妻の笑み

短日にせかされ時計刻打てり

冬籠背中合わせの夫と我

潜る鳩浮かぶ鳩あり舞台めき

宮原 凧

熱爛や秘密を少し打ち明ける

冴ゆる夜や乱歩短編読み終わる

木犀のここぞと香る夕間暮れ

熱爛や手酌で煽る角の美女

餅焼けば短気は長所厨事

浮かびては流る枯葉の一会かな

長尾 進一郎

短日や床屋帰りの一番星

冬晴れの富士の山肌近く見へ

白菜の光る食卓季節来る

年惜しむ白紙の残る日記帳

寒の入り薄着のままの散歩道

暖冬や木の葉躊躇ふ枝ばなれ

森田 元斐

北国の便りつまみに先ず熱爛

短日やこれよりの日々憾みなく

恙なく生きて踏みしむ黄葉かな

霧の奥暮らしを支える「」の灯

サイレンに停まる街並み朴落葉

軒昂の古老語りり秋点前

安藤 晃二

坂昇り下れば酒舗や根津の秋

熱爛や五臓六腑へカンフル劑

霧雨や根津の社の壮大に

足早に駅への歩道石路の花

石路の花白山の路地埋めけり

千駄木や漱石旧居石路かこみ

松田 一文字

日短や長く伸びたる人の影

神域をつつむ閑寂冬木立

木枯しや自転車カバー飛行中

熱爛やうわさ話と若女將

熱爛や目刺片手に手酌して

掃き終へし参道にはや落葉かな

西川 知世

東京の夜空明るし枯柳

オーナメント裾に混み合い生誕樹

霜囀ひ庭に実生の鉢二つ
冬の花火短き音の上りゆく
蛇笏忌の駅に原水禁の声
ランドセルに黄色のカバー空つ風

今回は令和七年一月九日（木）。兼題は季語「三が日」（志村良知さん出題）、席題は西川知世さん出題の「初」です。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

一月の兼題は「三が日」である。季は新年の項。

講談社の日本歳時記によると、正月一日・二日・三日の総称。この省略は広く一般に用いられている。いわば天下御免の、本格的正月気分。酔顔での参賀・挨拶も三が日ばかりはこころよく迎えられるよう。サンガニチという語感そのものにも弾みがある。（飯田龍太）の解説より。

三が日（三ヶ日）のあいだ、毎朝雑煮を祝い、賀詞のために出かけたり、年賀客を迎えたり、いまでもそれなりの正月風景が繰り広げられ、正月気分も相俟つてめでたく、正月気分は今でも十分にあるようだ。私が育った家では、一日は福を掃き出すからと箒を使わないという習慣だった。こどもは大きな布の上に座らされてお節やおやつを食べたことを思い出す。二日になると、人の出入りが多くなって、子供たちは部屋や外で遊び、賀

客の邪魔にならないように過ごした。三日になると大人に連れられて初詣に出かけ、ありたけのお年玉で買い物をした。何と言っても嬉しいのはお正月は叱られなかったこと。

現代の三が日は、過ごし方が自由になっている。おせちもデパートに並んでいる。どんな句が出されるか楽しみである。

一人居や思ふことなき三ヶ日

夏目漱石

こゝろよき炭火のさまや三ヶ日

飯田蛇笏

門さして寺町さみし三ヶ日

村上鬼城

三ヶ日わが部屋となる椅子鏡

山口波津女

ふるさとの海の香にあり三ヶ日

鈴木真砂女

三ヶ日やはらかきみち竹山に

岡井省二

後後と日和まさりに三ヶ日

松本たかし

三ヶ日静かにあれば静に過ぐ

松崎鉄之助

机上メモまだ白きまま三ヶ日

吉屋信子

三ヶ日家居楽しむ心あり

稲畑汀子

三ヶ日書齋は隠れ部屋めきて

山田弘子

里帰りといふも二駅三が日

戸恒東人